



## 金融教育の現場レポート



東京都立西高等学校

全国公民科・社会科教育研究会事務局長

篠田健一郎指導教諭

# 世界に通用する大きな器に 金融教育はまさにキャリア教育

生徒の言葉で意見を交換し考えをまとめる力を養う。

「金融教育」は、社会のなかで生きる力を育むことが目的の教育です。

このコーナーでは、金融教育の授業がどのように進められているか、教育現場に立つ先生や、授業を受ける生徒の姿をレポートします。

今回は、東京都立西高等学校（以下、西高）で「現代社会」を教える篠田健一郎先生の実践をご紹介します。



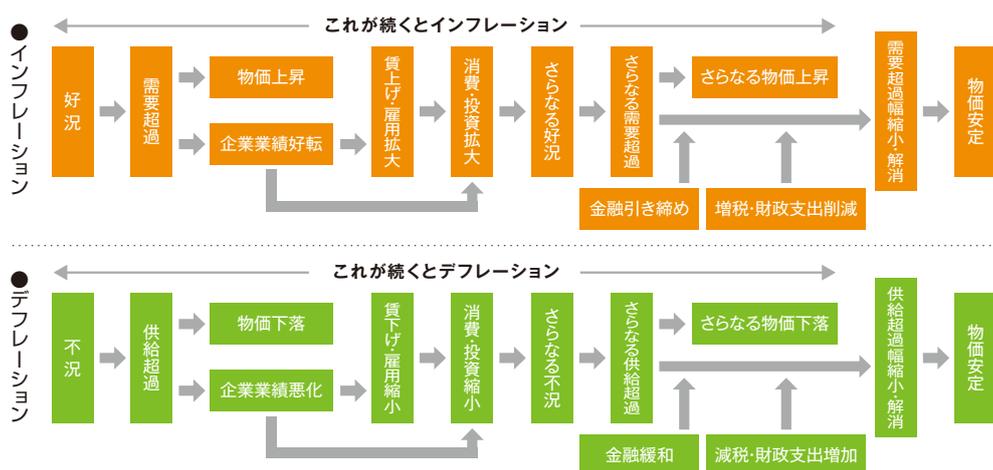
篠田健一郎指導教諭

## インフレとデフレの ワークシヨップ

夏休みを控えたある日。篠田先生が1年生の授業で「インフレとデフレ」についてワークシヨップ形式の授業を展開しました。この日の授業は「需要供給曲線を使ってインフレとデフレの仕組みを理解する」という内容です。

需要供給曲線を大きく板書し、まずは中学校の復習です。「需要曲線とは何を表していますか?」「需要曲線と供給曲線の交わりは、何を意味しますか?」と生徒に次々と質問を投げかけます。単なる知識を教えるのではなく、その図から読み取れる基本的な「考え方」を確認します。続いて、物価やインフレとデフレの定義を教科書で確認した後、フローチャート(図表1)を使ってそのメカニズムを丁寧に見ていきます。

図表1:インフレーション・デフレーションのフローチャート(板書のイメージ)



次にワークシート(図表2)の作業Iをグループで討議させることで、給与の増減による需要供給曲線の変化やそこから読み取れることを再確認していきます。篠田先生は話し合いの終了時刻を大きく板書。時間内に収めることも訓練と考えます。そして討論の最中には各グループを回り、その過程にも耳を澄ませます。



それぞれの考えを出し合い、比較してさらに考える。混乱しているところは教え合って学びを深めていく。

作業Ⅱでは野菜の需要や供給の変化により起こるインフレについて、需要供給曲線を使って説明します。「買いたい人が多くなるなら……」「値段が高くて買わないじゃない？」など活発な意見が聞かれます。こうしたやり取りの後、グループの代表者が黒板の前に出て発表します。

1人の生徒が需要曲線を右上方に移動した図を描きながらその理由を説明すると、「みんなどう思う?」。そして「このときこの野菜の価格はどうなりますか?」「売れるなら農家がこの野菜の生産を増やしたら?」など先生はクラス全体に問いかけやり取りします。「生産を増やしても、野菜だから影響が表れるのは翌年。そこが工業製品と違うところ」など、生徒の気づきにくい部分を補足します。

最後にインフレを創り出す政策を考えたという作業Ⅲを行います。篠田先生は「皆さんはほとんどインフレを経験したことのない世代だけ」と説明しながら、好景気を生み出す工夫を需要供給曲線の変化から考え出すよう促します。

再び教室が賑やかになりました。「モノの値段を上げるには……」「消費を増やすために何をすればいいかを考えればいいのか」。最後に各グループでまとめた政策は、「情報や宣伝を活発にして需要を喚起する」「所得税を減らして国民の余剰金を増やし、法人税も減らして

図表2:「インフレとデフレ」ワークショップのワークシート(一部)

- 作業Ⅰ-1** 勤労者の給与が増えたと、まず、需要供給曲線はどう変化するか。
- 作業Ⅰ-2** 勤労者の給与が減ると、まず、需要供給曲線はどう変化するか。
- 作業Ⅱ-1** 国民の嗜好の変化に伴い珍しい野菜への需要が増大した(ただし、ほかの財への需要は変化しない)ことで発生するインフレについて、需要供給曲線を使って説明しましょう。なお、ここでは総供給曲線は動かないものとします。
- 作業Ⅱ-2** 天候不順によって野菜の供給量が減少したことで発生するインフレについて、需要供給曲線を使って説明しましょう。なお、ここでは総需要曲線は動かないものとします。
- 作業Ⅲ** インフレを創り出すための具体的な政策を提言しましょう。

生産を増やす」「休日を増やしプレミアムフライデーなど、消費を増やすようにする」などさまざまなものが挙がりました。需要・供給、どちらの側の意見も挙げたことを篠田先生は評価します。「物価を変動させる要因について、いろいろな立場から考えることが大切です」。そう言って授業を締めくくりました。

### 発表と傾聴、そして議論で 思考力を育み、知識を深める

西高では「現代社会」を1年生の必修科目として配置しています。篠田先生は①生徒が世の中を見る眼、②生徒が自分自身を見る眼、③生徒が世の中からのどのように見られているかを知るという3つ



自分でまとめるスペースを十分にとったワークシートを用意する。シートの右部分にはインフレ・デフレのフローチャートも添えている。



需要供給曲線から読み取れることを確認し、さまざまな要因で曲線がどう変化するかを考察する。



グループワークの最中、生徒が何を参考にして、どこでつまづいているかにも注意を払う。



「政府が買上げようとしているのは、インフレにするため?」「それがどう影響するの?」一つの政策にまとめるため、知恵を出し合う。

の視点から授業を行っています。このため、教師と生徒のやり取りに加えて、生徒同士の議論や、生徒による発表を大切にしています。

生徒同士が話し合うことで、考えを軌道修正しながら新たな知識を得、思索を深めていくことができる。篠田先生は考えます。また発表の機会を多く持たせることによって、生徒が自分の言葉で物事を考える習慣を身に付けることができる。発表を聞く側が質問を考えることも、自らの価値判断の形成に役立つと考えます。

こうした取り組みの実践が、1年生「現代社会」の授業の冒頭で行う「3分間スピーチ」です。テーマは社会科学に関わるものなら何でも。「発表生徒が手を抜くとほかの生徒のひんしゆくを買いました」と思う。でもその失敗で鍛えられます」。

事前に細かな指導はしません。発表後、指導講評をしながら、スピーチの内容がいかに「現代社会」につながっているかを説明し、興味関心を高めます。生徒が混乱している部分を解きほぐし、いいエッセンスを引き出して評価。考え方や方法論、論理的な発表のしかたなど、具体的なアドバイスはそこで初めてします。

いい部分も悪い部分も、ほかの生徒と共有しながら講評。発表の失敗を事前指導で避けるのではなく、あえて体験させることがとても重要。「今失敗しておけば大学に入って怖いものではありません」。

自分がいいと思って話したものが、実際はだめだったという経験は、酷なようだけど大切です。そして「失敗のように見えても生徒に吸収するものがある限り失敗ではない」と話します。

こうした授業での先生の役割は「生徒同士が質問し合える環境をつくりながら、生徒たちには自らの発想で結論を導き出したと思わせること。それから、生徒同士の議論で終わらせるのではなく、指導講評の形で学問的な背景に基づきまとめることが大切です」。生徒は自らの学びが社会科学の入口にあることを実感します。このような主体的な学びは先生にとって大変もどかしいものですが、「じつと堪えて、生徒が自分の言葉で意見交換し、考える姿をひたすら見守ることが大切」だと付け加えます。

### キャリア教育としての金融教育

「金融教育はキャリア教育だと僕は思っています」と篠田先生。「経済社会の仕組みや相互扶助を知り、自らを理解し、価値観を形成して、自己実現を図るのがキャリア教育。金融はそのための素材をたくさん提供してくれます」。キャリア教育に力を入れ、「世界に通用する大きな器」をもった生徒を育成することを理念とした同校には欠かせない教育です。「現代社会」の「金融」の単元にとどまらず、歴史や地理でも、金融はさまざま

## 宮本久也 校長 (全国高等学校長協会会長)



今の子どもたちは、社会への視野が昔よりも狭くなっている気がします。これは彼らだけのせいではなくて、育つ環境が大きく変わってきているからだと思いますね。

祖父母と同居していた時代は、家のなかにもいろいろな社会経験をした人がいて、その話を聞く機会がありました。親戚づきあいなどで、大人が集まって話をしている場に子どもたちがいる、という機会も格段に少なくなっています。世の中がどう動き、自分たちが大きくなったらどういうことで困るのかというようなことも、今の子どもたちには情報が少ないんです。

さらに地域社会との関わりも希薄になっています。子どもは家庭でも育ち、社会からも育ててもらうものでしたが、今は学校という場で教えていかないと、自分と社会との関わりを何も知らないで大人になってしまうということになりかねません。

金融教育に関しても、身内に年金で暮らしている人がいるとか、事業に失敗した親戚がいるとか、友人の家が自営業で、お金稼いで大変だなあ、など自然に理解できたものですが、今は家庭のなかでもお金の話をすることはむしろ避けられているのではないのでしょうか。

彼らが社会に出て、一人前に生きていくために必要な力を身に付けさせるのが学校教育の役割です。そのためにどういふのが必要なのか、という観点をわれわれは忘れてはいけません。彼らが生きていくこれからの時代はなかなか厳しいですからね。どうやって自分の生活を維持していくのかを考えると意味で、金融教育はとても大きいと思います。



「曲線がこう変化したら新しい交点は?」「それは何を意味する?」  
発表者と生徒全員に質問を投げかけ、理解を深める。



生徒の発表の後は、その内容を絡めてきちんとまとめをする。  
1対多でも主体的授業が行われていることが、生徒の眼差しからもわかる。

な事柄に関係している。だからいろいろな単元で、家計や年金、企業、市場経済、金融政策などの話を積み込んでいくのだそう。明確な答えのない金融の問題は、生徒に考えさせる機会を与える絶好の教材であることも、篠田先生が金融教育に積極的に取り組むゆえんです。

「今アクティブラーニングが目目されていますが、単に生徒が手を動かせばいいというものではありません。大事なのは生徒に考えさせること。だから講義形式の授業であっても、生徒の頭のなかでアクティブであればいいんです」。1人の生徒への質問が、実は40人全員に投げかけられていて、それぞれが自分だったらどう答えるかを考えるような授業なら、普段の授業でもアクティブラーニングなのだ。「授業を一方的な説明で終わらせず、少しでも考えさせれば、年間50回くらい考える機会を作ることが出来ます」。

生徒の実態や学校の特質に応じて、適宜体験型授業も取り入れます。以前篠田先生が勤務した別の高校で、「株式会社を作ろう」というワークショップをしたとき、クラス一つを市場に見立て、10チームでそれぞれ会社を設立しました。しかし一つだけやる気のないチームがあったそうです。その影響でクラス全体の株価も上がらず、売上も利益も出なくなりました。すると生徒の1人が「社会って、みんながベストを尽くすことが前提で、

一つでもそうでないチームがあれば崩壊するんだとわかった」と突然言い出した。「すごい発見だと絶賛しました」。こうした社会を見る眼を養っておくと社会保障や労働についても理解が進み、進学や就職も真剣に考えるようになる。篠田先生は話します。これこそが金融教育はキャリア教育だということにほかなりません。

### 情報を与えるのではなく、 力を引き出し導く教育を

今の生徒はスマホを持ち、情報はたくさん持っています。先生は生徒に情報量では優位に立てないかもしれませんが、物の見方や考え方を指導し、思考力や判断力を養うことが果たすべき役割となると言えます。

「educate(教育する)の語源はラテン語で『引き出す』。生徒の持っている潜在能力を引き出すのがわれわれの役目。そのためにどれだけ多様な経験をさせることができるのか。その経験をどう勉強に戻してあげるのか。そのナビゲーターが教員として求められます。われわれも知らないことはたくさんあります。でも生徒にとって、この学びを意義あるものにしなくてはという気持ちはあふれるほどあります。情報量が足りなくとも指導者としてできることはたくさんあり、生徒が大きな器になりさえすれば、われわれは捨て石でいいんです」。

※金融広報中央委員会の「金融教育プログラム」には、高校での「インフレとデフレ」に関する授業の指導計画例が含まれています(183~190頁参照)。この執筆を担当したのが篠田先生です。